

# 反障害通信

22. 6. 18

120号

## そもそも民主主義とは何だろう？

はじめに

わたしはかつては民主主義批判をしていました。民主主義は、封建時代、王政、専制政治、独裁支配などが存在している時代にその批判として突き出すのに有効だとしても、一応「国民主権」を突き出している国において、なぜ今更、「民主」の民主主義なのかという思いがありました。むしろ、民主主義ということが議会制民主主義ということで、支配の構造として機能していることがあり、むしろそのようなところで民主主義批判をしていく必要性をとらえ返していました。

そのような考え方に転換をもたらしたのは、民主主義の反対語を考えていたとき、「国家主義」ということが思い浮かんだからです。

**王制や天皇制の存在するところに民主主義はあり得るのでしょうか？**

さて、「国家主義」を取り上げる前に、それ以前に、「民主主義」を標榜するところになぜ、王制など存在し得るのか、という問題があります。封建制度や権力の世襲制をトーマス・ペインが『コモン・センス』で批判したのが18世紀です。それでも、西洋においても王制を一掃していません。わたしは、王制が存在する国は、アバウトに言って、民主主義が歪められているという仮説をたてています。細かい分析が必要です。そこまで、手が回りません。とりあえず、日本政治を取り上げます。

日本においては民主主義という概念が西洋からもたらされたとき、そのキリスト教的天賦人權論を福沢諭吉（註1）が、「天はひとの上にひとを作らず、ひとの下にひとを作らず」という言葉で表しました。日本はさまざまなかで「人權後進国」と批判されています。天皇制は象徴天皇制と言われていますが、同時に差別の象徴としての役割ももっているとわたしは押さえています。天皇制の家父長的役割における性差別、国家が福祉を施すというところの「恩恵としての福祉」というところを天皇制が担ってきたことなどなど。天皇制は民主主義の障害物でしかなかったのです。

**日本に民主主義は定立したのでしょうか？**

日本の戦後民主主義は占領軍によってもたらされたと言われていています。ですが、天皇制を残し、そのことによって、日本的ファシズムの核としてあった、また引き続き核となりうる天皇制ファシズムを否定しきりなかつた、またファシズムと軍国主義の象徴としてあった靖国神社の解体もなさない中で、民主主義が定立したと言えるのでしょうか？ 実際天皇制批判をすると右翼から銃撃されたり、過去の戦争や植民地支配を批判している団体が集会をすると、右翼の街宣車が来るとか、個人的にも脅迫されるなどの戦後の長い歴史があり、まるで天皇制批判がタブーとなっているような風潮で、一体民主主義が定立したと言えるのでしょうか？

## 日本型ファシズムの総括が必要

日本は過去の戦争と植民地支配の反省を数々の「談話」として発表してきました。ですが、その後で内閣の一員や自民党の中から、それをリセットする発言が出て来ました。中にはそれで辞任したひともいたのですが、麻生太郎元副総理のように辞任もしないで居座り続けていた状況があり、そして軍国主義の象徴としてある靖国神社に与党議員が集団参拝することさえ続いていました（註2）。そして、「いつまで謝罪すればいいんだ」というそもそも謝罪ということの意味も分からない、人間関係の基本的なことが分からない与党議員の発言がメディアで流されています。近隣諸国との友好関係を阻害するような議員は政権与党は除名することです。

あの民主主義的政治の空白の七年八ヶ月を作り出した安倍元首相が戦後七十年の節目にと出した「安倍談話」なるもののひどさがそれを象徴していることです。これは、「いつまであやまればいいんだ」というところに応答する内容で、若い世代に謝罪をさせないというところで、形だけ植民地支配と戦争の反省の文言を入れた、似而非「謝罪」なのです。謝罪するなら、若い人たちにも謝罪ということを引きついでいくということになるはずなのです。

結局、何が問題なのかというと、日本は日本型ファシズムということの反省が欠落しているのです。そもそも歴代政府が、そして国会での議論でも、日本型ファシズムに関する議論がなされた歴史があるのでしょうか？

## 民主主義が対峙しているのは国家主義

少なくとも「国民主権」を突き出している社会においては、民主主義が定立しているといわれているのですが、先に書いたように王制や天皇制があるところでは、身分制的なことが残っている、また家柄意識のようなことでの象徴となることが維持されているので、民主主義が歪められているのです。

国家主義批判は、一般に「国家のために国民はあるのではない、国民のために国家があるのだ」というところでの突き出しがなされるのですが、国益という論理や愛国心というようなところで、国家主義の飲み込まれていくことがあります。第一次世界大戦突入時の、第二インターナショナルの要的存在としてあったドイツ社会民主党がいとも簡単に、ナショナリズムに飲み込まれ、戦時公債発行に賛成票を投じ、第二インターナショナルが崩壊したこともそれは現れています。だからこそ、国家という共同幻想からの「自立」（註3）や「脱構築」（註4）が必要なのです。

全体主義批判をしているアーレントはナチズムの分析で、民族主義や国家主義、合わせてナショナリズム的なことを突き出していないと書いているのですが（註5）、わたしは、「第三帝国」という突き出しをしているところの超国家主義で、またユダヤ人のホロコーストやアリア人種主義的なところを突き出した人種差別主義——レイシズムで、それは超ナショナリズムだと押さえています。

## 国家主義的ではない反民主主義——ファシズム的もしくはファシズム勢力

さて、トランプ前アメリカ大統領は、アメリカファーストの国家主義を突き出していました。まさにファシズム的な突き出しだったのですが、アメリカにはネオコンと言われている勢力があり、それもファシズム的なことを突き出しているのですが、それは一応自由

を標榜して、新自由主義を突き出しているのが、ファシズム的存在と規定するひとは少ないのですが、これは自由という名の抑圧としての新自由主義、超競争原理主義の自己責任論の突き出しなのです。そしてもうひとつ押さえねばならないことは、新自由主義は新自由主義的グローバリゼーションとも言われているので、国家主義的ではないと誤解しているひともいるのですが、国家主義と新自由主義的グローバリゼーションは両立し得るのです。

このことは日本におけるネオコンともいうべき「維新の会」をとらえかえしていけば明らかになります。「維新の会」は、選挙で民意を得たらゼロサム的に反対意見を封殺してもいいんだというような政治をしています。情報公開というところできちんとやっていると言って民主主義的な粉飾をしています。記者会見の場は特定のマスコミ攻撃としてのやっつけ主義的なバトルによって、反対意見を封殺しようとする姿勢はまさにファシストそのものです。

民主主義は少数意見の尊重ということがあり、徹底した議論の中で同意を得ていくという作業が必要であり、分断を避けるという前提があり、その中で必要ならば多数決で決めるということもあるとされていることです。それを最初から、形だけの議論で、数によって予め決まっているという体では、「議会制民主主義」という形での似而非「民主主義」では、むしろ支配の一形態に過ぎなくなっているという批判にもなるのです。それはまさにファシズム的政治でもあるのです。

また、ベーシックインカム論を突き出したり、教育の無償化（註6）も突き出しているのが、何か変革の党的な誤解を生み出してもいるのですが、そもそもベーシックインカムの定義をきちんとしていけば、「維新」が言っているベーシックインカムは、「自己責任」を徹底させるための、福祉の切り捨てのための「似而非ベーシックインカム」なのです（註7）。

#### まとめ

民主主義論を深化させるためには、ファシズム論との対話の中で深化させる必要を感じています。特に日本の場合、日本型ファシズムの天皇制ファシズム批判が必要になっていきます。この天皇制ファシズムの流れ中での右翼のテロリズムによって語ることを抑圧する——躊躇するような状況が生み出されています。わたしは反暴力主義を突き出していますが、「右の頬を叩かれたら左の頬をだせ」とかガンジー的差別的関係を封殺してしまうような非暴力主義の立場はとりえません。それは、右翼のテロ——暴力を恐れて沈黙するならば、反暴力主義にはならず、むしろ暴力の容認になってしまうことと同梱です。勿論、現実に暴力に対抗するからといって安易に暴力の行使をするわけでもありませんし、運動を広げるための非暴力主義的な選択も必要になります。まさに弁証法的（註8）な反暴力主義と非暴力主義の対話での姿勢だと言えます。

#### （註）

1 福沢諭吉の本、民主主義論の議論をしているときに勧められていたのですが、脱亜欧入的などころでのアジアへの軽視と、帝国主義的なことを書いているという批判を読んだところで、批判のために読むということを課題にしつつ、まだ果たせていないのですが、

幾らかは標語的になっているところでは、使わせてもらっています。

2 新型コロナの拡大の中で集団参拝一時期中止していたようですが、また復活しているようです。

3 この「自立」という概念は、吉本隆明さんの概念です。元々はマルクス／エンゲルスの『ドイツ・イデオロギー』という草稿の中の、国家の「幻想共同体」規定から来ているようです。吉本さんは反差別というところへのアンチ的なことがあって、そして意識の強調がマルクス派の唯物史観的な流れから外れてしまうというところで、わたしは批判的です。尤も意識論は、物象化論とのからみでも必要なのだとは押さえているのですが。

4 「脱構築」概念は、デリダが打ち出し広めた概念です。既成観念を覆すというところでは、マルクスの流れの物象化概念と、ポスト構造主義といわれる流れがあります。尤もデリダ自身は、ポスト構造主義といわれることを受け入れていないようなのですが。わたしも「脱構築」概念は援用しています。

5 たわしの読書メモ・・ブログ 588／・ハナ・アーレント『全体主義の起原3 ——全体主義』みすず書房 1974

6 教育の無償化という、子どもに留目しているところは、ヒットラー・ユーゲントをわたしは想起してしまうのです。

7 ベーシックインカム（基本所得保障）というのは、それで基本的な生活、文化的な生活が出来る金額の給付ということです。生活の足しになるという金額では、ベーシックインカムとは言わないのです。竹中平蔵新自由主義者や維新の議員もベーシックインカムを言っていますが、それは、「後は自己責任で」という、福祉の切り捨て・抑制のための似而非ベーシックインカムなのです。また、そもそも一律同額給付だけでお終いにしたら、それで生活できない「障害者」は生きれなくなります。だから、基本所得保障ではなく、基本生活保障が必要なのです。ちなみに、わたしはベーシックインカムを導入したら、資本主義は崩壊すると指摘しています。そこで、ベーシックインカムを突き出していたのは、ネグリ／ハートの『<帝国>』での論攷です。構造改革的革命論なのです。資本主義を擁護するひとや、「市場原理はなくなるならない」とか言っているひとが、ベーシックインカムなど言っているのは、ベーシックインカムの意味を理解出来ない非論理的論攷と言わざるを得ません。

8 「弁証法」というと、後年マルクスの解説者となったエンゲルスが、弁証法の三法則とか突き出し、「弁証法」を法則として突き出し、それが、マルクス・レーニン主義として定式化されていきました。これは、ヘーゲルの「絶対精神の自己展開」としての疎外・外化概念から出てきているところで、青年ヘーゲル派として出発したマルクス／エンゲルスで、エンゲルスが先祖返りしたと批判されていることです。

弁証法は、従来対話という意味から発した概念で、対話の中で、論的深化をなしていくという概念なのです。

(み)

(「反差別原論」への断章) (49) としても)

## 読書メモ

前回までに二回にわたって、マルクスの歴史三部作をとりあげました。今回は、まずは「ユダヤ人問題によせて」と、それと岩波文庫で一緒になっている「ヘーゲル法哲学批判序説」です。もともと、これはハナ・アーレントの『全体主義の起源』という三部作の「1——反ユダヤ主義」のすぐ後に読む予定だったのを、三部作をまとめて読むというところで延ばし、三部作の最後の「3——全体主義」を読んだ時点で、ファシズム論の一環としてのボナパルティズムを押さえるために、マルクスの歴史三部作の『ルイ・ボナパルトのブルユメール十八日』を先に読みました。そして、今度は、マルクスの歴史三部作をまとめておきたいと、どんどん先送りになり、後回しになっていたものです。「ユダヤ人問題によせて」はマルクスの数少ないユダヤ人問題に関する論攷、しかもユダヤ人への批判的論攷でした。また、国家と市民社会の分離を展開していることで注目されているのですが、今日的には、むしろ政治の市民社会への介入というところで、この図式はむしろ否定的に取り扱われています。「ヘーゲル法哲学批判序説」は、初期マルクスの青年ヘーゲル派からの離脱と、唯物史観的などころの確立としての論攷になっています。さて、わたしは今の時点で、マルクスの本格的再読に入るつもりはなく、ここで一応お終いにすることだったので、かつて読んでいたのですが、ほとんど頭に残っていない、アナキストのプーードンの『貧困の哲学』の批判の書、『哲学の貧困』を再読しました。この本は、マルクスの唯物史観確立というところで大きな意味をもつ、そしてマルクスの哲学から経済学へ重点を移行していくところで、メルクマールの意味をもっている書です。ここで、マルクスの再学習は一応お休みです。

たわしの読書メモ・・ブログ 592

・カール・マルクス／城塚登訳『ユダヤ人問題によせて ヘーゲル法哲学批判序説』岩波文庫（岩波書店）1974

これは、と言っても、「ユダヤ人問題によせて」の方だけですが、ハナ・アーレントの『全体主義の起源』の三部作の第一冊目「反ユダヤ主義」の直後に読むことだったので、アーレントを続けてまとめて読みたいとのことで、後回しにしていました。そして、『全体主義の起源』の読了後は、主題が全体主義——ファシズムになっていて、なんとしても『ルイ・ボナパルト・・・・』を先に読まねばという思いで、それをさきに読み、ついではマルクス歴史三部作の読了に入りました。で、やっこの『ユダヤ人問題によせて ヘーゲル法哲学批判序説』に帰ってきた次第です。

これはマルクスがルーゲと共同編集していた『独仏年誌』第一、第二分冊合併号に、他の面々とともに、この二つの論攷を掲載したものです。その内容は、「訳者解説」の179-80Pに掲載されています。

さて、最初にこの本の目次をあげておきます。

### 目次

ユダヤ人問題によせて

ヘーゲル法哲学批判序説

一八四三年の交換書簡

マルクスからルーゲへ（三月）  
ルーゲからマルクスへ（三月）  
マルクスからルーゲへ（五月）  
バクーニンからルーゲへ（五月）  
ルーゲからバクーニンへ（六月）  
フォイエルバッハからルーゲへ（六月）  
ルーゲからマルクスへ（八月）  
マルクスからルーゲへ（九月）

## 訳注

### 訳者解説

これは初期マルクスで取り上げられる二つの論文です。訳者の城塚登さんは日本における初期マルクスの研究者として著名で、この本の訳者解説が、初期マルクス研究の基本的文献になるような解説になっています。マルクスは青年ヘーゲル派内の内部論争を経て、そしてエンゲルスとの対話のなかで、独自の思想・理論を形成していきます。マルクスの画段階的飛躍は二回あるとわたしは押さえています。第一は、青年ヘーゲル派からの独自の理論形成の一応の完成をみたのが『ドイツ・イデオロギー』で、そこでの画段階的批判があります。もうひとつは、あまりとりあげられていませんが、『共産党宣言』から『資本論』草稿の執筆過程でのマルクスの転回というようなこと、わたしはこれを反差別論的なところへの萌芽的なこととして取り上げようとしています。これはエンゲルスとの乖離という意味ももってしまっています。

さて、これは初期マルクスの記念碑的三作品です。一応分けて論じます。

### ユダヤ人問題によせて

これは、ハナ・アーレントが、マルクスはユダヤ人問題で、ほとんど論攷を残していない、その中で書いている唯一とも言える文が、この『ユダヤ人問題によせて』で、しかも、反ユダヤ主義批判ではなく、むしろユダヤ民族批判の文になっているという主旨の文を書いています。よく知られているように、マルクスは、キリスト教に改宗したユダヤ人の家族のなかで育っています。そもそも、青年ヘーゲル派の、宗教批判のなかから思想を確立していくということがあり、マルクスも宗教批判をなしていくのです。で、ユダヤ人被差別から無縁ではなかったのでしょうか、それよりも、ユダヤ民族が、ユダヤ教の選民思想の中で、差別されるのはいやだ、差別する側になりたいという差別的なところから脱し得ないユダヤ思想のもつ構造がありました。そして一部エリート層がまさに資本主義の精神を体現する、金儲け主義的そのものに走るなかで、宗教批判と資本主義批判ということが重なる中での、ユダヤ教・ユダヤ民族主義批判を展開していくことになります。

この論攷は宗教批判の書なのですが、もう一つ焦点が当てられたのが、国家と市民社会の分離という初期マルクスの論攷として注目されています。実は、これ帝国主義論を十全に押さえられなかったマルクスの限界性の話ともリンクしていきます。そもそも、まだ、帝国主義ということが十全にとらえられていなかった時代制約性の問題もあるのですが、今日的には、というより、後期マルクスは、この「国家と市民社会の分離」ということを

どうとらえていたのでしょうか？ まだ、経済と政治の分離、国家権力は、経済は経済の論理に任せるという事態があったのですが、今の時代は、「国家独占資本主義」という規定があるように、公的資金を株に投入し、株価を調整する、為替市場にも国の資金を投入するなど、国家と市民社会の分離など、何をか言わんか、の時代になっています。

また、ルソー人権論との対話のようなことも展開していて 52-3P、マルクスの思想形成過程を垣間見ることができます。

さて、切り抜きメモを特に気になったところだけ、抜き書きします。

#### 一 ブルノー・バウアー「ユダヤ人問題、ブラウンシュヴァイク、一八四三年

「ユダヤ人とキリスト教徒とのあいだの対立のもっとも頑固な形態は、宗教上の対立である。一般にひとは対立をどのようにして解決するか？ 対立を不可能にすることによってである。どうすれば宗教上の対立は不可能になるか？ 宗教を揚棄することによってである。ユダヤ人とキリスト教徒が、お互いの宗教を、ただもう人間精神の別々の発展段階として、つまり歴史によって脱ぎすてられた別々の蛇の脱けがらとして認識し、そして人間をそれらの脱けがらを脱皮した蛇として認識しさえすれば、彼らはもはや宗教上の関係のなかにいるのではなく、ただ批判的で学問的な関係、すなわち人間的な関係のなかにいることになる。そのとき、学問は彼ら〔ユダヤ人とキリスト教徒〕の統一である。そして学問上の諸対立は、学問自身によって解決されることになる。」 11P

「バウアーの誤りは、彼がただ「キリスト教国家」だけに批判を加えて「国家それ自体」に批判を加えていないこと、政治的解放の人間解放に対する関係を究明せず、そのために、政治的解放と普遍的人間解放との無批判な混同ということからしか説明できないような諸条件を立てていることにある。」 16P・・・*非対称性*

「ユダヤ人問題は、ユダヤ人が住んでいる国家が異なるにつれて、異なるとらえ方がなされる。政治的国家、つまり国家としての国家が実在していないドイツでは、ユダヤ人問題は純粋に神学的な問題である。」「フランスでは、すなわち立憲国家では、ユダヤ人問題は立憲制の問題であり、政治的解放の不徹底に関する問題である。」「北アメリカの自由諸州において——少なくともその一部において——はじめて、ユダヤ人問題はその神学的な意味を失い、実際に世俗的な問題となっている。」 17P

「われわれは、世俗的問題を神学的問題に変えたりはしない。われわれは、神学的な問題を世俗的な問題に変えるのである。」 19P

「さらに、公民的性格、政治的共同体が、政治的解放者たちによって、これらのいわゆる人権の保持のための手段にまで格下げされ、したがって公民〔cytoyen〕は利己的な人間〔homme〕の下僕であると宣言され、人間が共同的存在としてふるまう領域が、部分的存在としてふるまう領域の下に引きおとされ、結局のところ、公民〔cytoyen〕としての人間が、本来のそして真の人間だと受けとられたことを見るとき、あの事実はますます謎を深める。」 46-7P・・・*下線をつけている意味？ 今日的には、「本来の」「真の」と設定することの問題性*

「結局のところ、市民社会の成員としての人間が、本来の人間とみなされ、公民〔citoyen〕とは区別された人間〔homme〕とみなされる。なぜなら、政治的人間がただ抽象された人為的につくられた人間にすぎず、比喩的な精神的な人格としての人間であるのに対し、市

民社会の成員としての人間は、感性的な、個体的な、もっとも身近なあり方における人間だからである。現実の人間は利己的な個人の姿においてはじめて認められ真の人間は抽象的な公民 [citoyen] の姿においてはじめて認められる。」 52P

「あらゆる解放は、人間の世界を、諸関係を、人間そのものへ復帰させることである。／政治的解放は人間を、一方では市民社会の成員、利己的な独立した個人へ、他方では公民、精神的人格へと還元することである。／現実の個体的な人間が、抽象的な公民を自分のなかに取り戻し、個体的人間でありながら、その経験的生活、その個人的労働、その個人的諸関係のなかで、類的存在となったとき、つまり人間が彼の「固有の力」 [forces propres] を社会的な力として認識し組織し、したがって社会的な力をもはや政治的な力というかたちで自分から分離しないとき、そのときはじめて、人間的解放は完遂されたことになるのである。」 53P・・・フォイエエルバッハの「類的存在」概念の影響下

二 ブルーノ・バウアー『現代のユダヤ人とキリスト教徒の自由になりえる能力』(『ニーボーゲン』五六—七一ページ)

「ユダヤ教は、歴史にもかかわらず存続してのではなく、かえって歴史によって存続してきたのである。／市民社会はそれ自身の内臓から、たえずユダヤ人を生み出すのだ。／もともとユダヤ教の基礎となっているものは何であったか。実際の欲求、利己主義である。／それゆえユダヤ人の一神教は、現実においては多数の欲求の多神教であり、便所に行くことさえも神の律法の対象とするような多神教である。実際の欲求、利己主義は市民社会の原理なのであり、市民生活が自分のなかから政治的国家をすっかり外へ生み出してしまいうやいなや、純粋にそういう原理として現われてくる。実際の欲求と利己との神は貨幣である。」 62P・・・資本主義の精神としての貨幣の物神化を体現するユダヤ教

「キリスト教はユダヤ教から発生した。それらはふたたびユダヤ教のなかへと解消した。／キリスト教徒は、そもそものはじめから、観想的な態度をとるユダヤ人だったのであり、したがってユダヤ人は、実践的 [実際の] なキリスト教徒なのであって、実践的キリスト教徒はふたたびユダヤ人となったのだ。」 65P

「キリスト教はユダヤ教の崇高な思想であり、ユダヤ教はキリスト教の卑俗な適用である。」 66P・・・「崇高な思想」としての人権論、所詮ごまかしのブルジョア思想

「ユダヤ人の社会的解放は、ユダヤ教からの社会の解放である。」 67P・・・キリスト教にもあてはまる

### ヘーゲル法哲学批判序説

この論攷は、マルクスの青年ヘーゲル派からの離脱とも言える文で、宗教批判から、国家と宗教の関係を軸に、国家論を展開している論攷です。また、ドイツの経済的政治的「後進性」を押さえ、ドイツ解放の積極的可能性について展開しています。この文の中で、革命主体としてのプロレタリアートということを展開しています。マルクスのプロレタリア革命論の端緒とも言える論攷になっています。

切り抜きメモを簡単に残します。

「ドイツにとって宗教の批判は本質的にはもう果たされているのであり、そして宗教の批判はあらゆる批判の前提なのである。」 71P

「反宗教的批判の基礎は、人間が宗教をつくるのであり、宗教が人間をつくるのではない、



ということにある。しかも宗教は、自分自身をまだ自分のものとしていない人間かまたは一度は自分のものとしてもまた喪失してしまった人間か、いずれかの人間の自己意識であり自己感情なのである。しかし、人間というものは、この世界の外部にうずくまっている抽象的な存在ではない。人間とはすなわち人間の世界であり、国家であり、社会的結合である。この国家、この社会的結合が倒錯した世界であるがゆえに、倒錯した世界意識である宗教を生み出すのである。……それゆえ、宗教に対する闘争は、間接的には、宗教という精神的芳香をただよわせているこの世界に対する闘争なのである。」71-2P・・・「倒錯した世界」という規定から「ド・イデ」の「共同幻想」規定へ

「宗教上の悲慘は、現実的な悲慘の表現でもあるし、現実的な悲慘の表現でもあるし、現実的な悲慘にたいする抗議でもある。宗教は、抑圧された生きものの嘆息であり、非常な世界の心情であるとともに、精神を失った状態の精神である。それは民衆の阿片である。」72P・・・有名な規定

「民衆の幻想的な幸福である宗教を揚棄することは、民衆の現実的な幸福を要求することである。民衆が自分の状態についてもつ幻想を棄てるよう要求することは、それらの幻想を必要とするような状態を棄てるようよう要求することである。したがって、宗教への批判は、宗教を後光とするこの涙の谷〔現世〕への批判の萌じをはらんでいる。」72-3P

「それゆえ、真理の彼岸が消えうせた以上、さらに彼岸の真理を確立することが、歴史の課題である。人間の自己疎外の聖像が仮面をはがされた以上、さらに聖ならざる形姿における自己疎外の仮面をはぐことが、何よりもまず、歴史に奉仕する哲学の課題である。こうして、天国の批判は地上の批判と化し、宗教への批判は法への批判に、神学への批判は政治への批判に変化する。」73P

「一八四三年のドイツの状態を否定したとしても、フランス暦からいえば、私はやっと一七八九年のところにいるかいないかであって、現在という時代の焦点にたっているところではない。」74P・・・ドイツの政治的「後進性」、イギリスの経済、フランスの政治、ドイツの哲学

「近代の旧体制は、もはや、本物の主役たちがすでに死んでしまっている世界秩序の道化役者でしかない。」78-9P

「フランスやイギリスでの問題は、国民経済かそれとも富に対する社会の支配かということであるのに、ドイツでの問題は、国民経済かそれとも国民に対する私有財産の支配かということである。したがって問題は、フランスとイギリスは行きつくところまで行った独占を揚棄することにあるのに、ドイツでは独占が行きつくところまで行くことにある。あちらでは解決が問題であり、こちらではやっと衝突が問題になっている。」80P

「古代諸民族が自分たちの前史を想像のなかで、つまり神話のなかで体験したように、われわれドイツ人はわれわれの後史を思想のなかで、つまり哲学のなかで体験した。われわれは現代の歴史的な同時代人ではなく、その哲学的な同時代人である。……先進諸国民のなかでは近代的国家状態との実践的な対決であるものが、そうした国家状態そのものがまだ一度も存在したことがないドイツでは、まずそのような国家状態の哲学的反映との批判的な対決となる。」81P

「一言でいえば、君たちは哲学を実現することなしには、哲学を揚棄することができない

のである。」 82P

「ドイツの国家哲学と法哲学は、ヘーゲルによってもっとも首尾一貫した、もっとも豊かな、もっとも徹底したかたちで示されたのであるが、これに対する批判は二面をもっており、近代国家とそれに関連する現実の批判的分析であるとともに、またドイツの政治的および法的意識の従来のある方全体の決定的否定である。そしてこのドイツの政治的および法的意識のもっとも優れた、もっとも普遍的な、学にまで高められた表現こそ思弁的法哲学そのものにほかならない。」 83-4P・・・青年ヘーゲル派としての出発点

「ドイツの政治意識の従来のある方にたいする決定的な反対者であるということからしても、思弁的哲学の批判は、批判そのものにとどまるものでなく、実践だけが解決手段であるような課題へと進んでいくのである。」 84P

「批判の武器はもちろん武器の批判にとって代わることはできず、物質的な力は物質的な力によって倒さねばならぬ。しかし理論もまた、それが大衆をつかむやいなや、物理的な力となる。理論は、それが人間に即して [ad hominem] 論証をおこなうやいなや、大衆をつかみうるものとなるのであり、理論がラディカル [根本的] になるやいなや、それは人間に即しての論証となる。ラディカルであるとは、事柄を根本において把握することである。ドイツの理論がラディカリズムである明白な証明、したがってその理論の実践的エネルギーの明白な証明は、その理論が宗教の決定的な、積極的な揚棄から出発したところにある。宗教の批判は、人間が人間にとって最高の存在であるという教えでもって終る。したがって、人間に貶められ、隷属させられ、見捨てられ、蔑視された存在となっているような一切の諸関係——畜犬税の提案にさいして、或るフランス人が「あわれな犬よ、おまえたちを人間並みにしようというのだ！」と叫んだ言葉でもっともみごとに描きだされているような諸関係——をくつがえせという無条件的命令をもって終るのである。」 85-6P

「すなわち、およそ革命には受動的な要素が、物質的な基礎が必要である。」 87P・・・唯物史観 (のはしり?)

「ドイツは、キリスト教という病にかかって衰弱している物神崇拜者に似ているといえよう。」 88P・・・物象化論 (のはしり?)

「われわれがその長所にあずかることのない近代国家の世界の文明的欠陥を、われわれがたっぷり享受している旧体制の野蛮的欠陥と結び合わせざるをえなくなっており、その結果ドイツは、自分の現状を越えたところにある国家形態の合理性に、そうでなければ少なくとも非合理性に、ますます参与せざるをえなくなっているのである。」 88-9P

「一国民の革命と市民社会の一特殊階級の解放とが一致し、一つの立場が社会全体の立場として通用するためには、逆に社会の一切の欠陥が或る他の階級のなかに集中していなければならない、また或る特定の立場が一般的障害の立場、一般的障壁 [拘束] の化身でなければならない、またさらに、或る特殊な社会的領域が、社会全体の周知の罪とみなされ、そのためこのからの解放が全般的な自己解放と思われるようになっていなければならない。或る一つの立場が優れた意味で [par excellence] 解放する立場であるためには、逆に他の一つの立場が公然たる抑圧の立場でなければならない。」 91P

「では、どこにドイツ解放の積極的な可能性はあるのか? /答え。それはラディカルな鎖につながれた一階級の形成のうちにある。市民社会のいかなる階級でもないような市民社

会の一階級、あらゆる身分の解消であるような一身分、その普遍的な苦難ゆえに普遍的な性格をもち、なにか特別の不正ではなく不正そのものを蒙っているがゆえにいかなる特別の権利をも要求しない一領域、もはや歴史的な権原ではなく、ただなお人間的な権原だけを拠点にすることのできる一領域、ドイツの国家制度の諸帰結に一面的に対立するのではなく、その諸前提に全面的に対立する一領域、そして結局のところ、社会の他のすべての領域から自分を解放し、それを通じて社会の他のすべての領域を解放することなしには、自分を解放することができない一領域、一言でいえば、人間の完全な喪失であり、それゆえにただ人間の完全な再獲得によってのみ自分自身を獲得することができる一領域、このような一階級、一身分、一領域の形成のうちにあるのだ。社会のこうした解消が一つの特殊な身分として存在しているもの、それがプロレタリアートなのである。」94P・・・プロレタリア革命論 (のはしり?)

「プロレタリアートは急に起こってきた産業の活動を通じて、ようやくドイツにとって生成しはじめつつある。なぜなら、自然発生的に生じてきた貧民ではなく、人為的につくりだされた貧民が、社会の重圧によって機械的に抑えられた人間集団ではなくて、社会の急激な解体、ことに中間層の解体から出現する人間集団が、プロレタリアートを形成するからである。もっとも、自然発生的な貧民やキリスト教的—ゲルマン的農奴も、しだいにこの隊列に加わるのは自明のことである。」94-5P

「哲学がプロレタリアートのうちにその物質的武器を見いだすように、プロレタリアートは哲学のうちにその精神的武器を見いだす。そして思想の稲妻がこの素朴な国民の地盤の根柢まで貫くやいなや、ドイツ人の人間への解放は達成されるであろう。」95P・・・哲学的革命家マルクス

「結論を要約しよう。／ドイツのただ一つ実践的に可能な解放は、人間を人間の最高のあり方であると宣言するところの、この理論の立場からする解放である。ドイツでは、中世からの解放は、同時に中世の部分的克服からの解放としてのみ可能である。ドイツでは、あらゆる種類の隷属状態を打破することなしには、いかなる種類の隷属状態も打破することができない。根本的なドイツは、根本から革命を起こさなければ、革命を起こすことはできない。ドイツ人の解放は、人間の解放である。この解放の頭脳は哲学であり、その心臓はプロレタリアートである。哲学はプロレタリアートの揚棄なしに自己を実現しえず、プロレタリアートは哲学の実現なしには自己を揚棄しえない。／あらゆる内的条件が充たされたとき、ドイツ復活の日はガリアの雄鶏の雄たけびによって告知されるであろう。」96P・・・マルクスのドイツナショナリズム?

#### マルクスからルーゲへ (三月)

「あなたは微笑しながら私を見て、こう問われる。それが何になるのか？ 羞恥からはどんな革命も起こりはしない、と。私はこう答える。羞恥はすでに一つの革命なのです。」100P

#### マルクスからルーゲへ (九月)

「それゆえ政治的國家の、この自己自身との衝突のなかから、いたるところで社会の真理が展開されるのです。宗教が人類の理論的諸闘争の内容目録であるように、政治的國家は人類の実践的諸闘争の内容目録なのです。こうして政治的國家は、共同体の一種としての [sub specie rei publicae] その形態において、あらゆる社会的闘争、欲求、真理を表現

しています。」144P

### 訳者解説

この解説は、それ自体が貴重な資料になっているので、それを取り上げると厩大な分量になります。ここでは、割愛しますが、この本を読まれる方は、是非きちんと読んでください。

たわしの読書メモ・・ブログ 593

#### ・カール・マルクス／山村喬訳『哲学の貧困』岩波文庫（岩波書店）1950

これは、マルクスが哲学から経済学へ焦点を移行していく過程の、プルードン批判を通じて、「最初のまとまった経済学的著書」（「**解題**」204P）として評価されています。マルクスはプルードンとの徹夜での議論などを経て、プルードンの『貧困の哲学』への批判としての本書をもってはっきりとプルードンと分岐していったのです。丁度、「共産党宣言」が出される前の年です。それは同時に、空想的社会主義者やアナーキスト批判を通しての唯物史観の形成過程です。当時はアナーキストがかなりの勢力をもっていて、その批判のなかで、マルクスの共産主義指向の運動を形成する必要があったのです。エンゲルスの序文にもあるように、まだ労働と労働力という概念の区別が曖昧であったり、利潤と利潤率という言葉遣いが曖昧性をもっていたのですが、ともかく、最初に本になった、経済学の書として、マルクスも後にこの本からの引用をしています。また、唯物史観や哲学的概念と経済学との対話ということもかなり突き出しているのです、そういう意味でも貴重な文献です。マルクスのプルードンとの対話（批判）による、経済学的概念の深化、マルクスのアナーキスト・プルードンとの対話（批判）による唯物史観の煮詰めという内容をもった著なのです。

最初に目次をあげておきます。この本の目次には、最初の「訳者序」「凡例」「はしがき」（——マルクス）が記されていない、また「**解題**」の後の「マルクスによる訂正について」も記されていません。

### 目次

#### 第一章 科学上の一発見

##### 第一節 効用価値と交換価値との対立

##### 第二節 構成された価値もしくは総合価値

##### 第三節 価値均衡の法則の適用

###### （イ）貨幣

###### （ロ）労働の剰余

#### 第二章 経済学の形而上学

##### 第一節 方法

###### 第一の考察

###### 第二の考察

###### 第三の考察

###### 第四の考察

第五の考察

第六の考察

第七のそして最後の考察

第二節 分業と機械

第三節 競争と独占

第四節 土地所有もしくは地代

第五節 同盟と労働者団結

附録

ドイツ訳に対するエンゲルスの序文

カール・マルクスの観たプルードン

マルクスの著作「経済学批判」ベルリン、一八五九年からの抜粋（六一—六四頁）

アネンコフ宛のマルクスの手紙

訳者註

解題

事項索引

人名索引

章や節、附録に沿った切り抜きを残します。

第一章 科学上の一発見

第一節 効用価値と交換価値との対立

「効用価値」13P・・・プルードンの文の引用としてだしているし、後には、この本の中24Pにも出てくる「使用価値」と表現されること。

「中世に於けるが如く、人々が剰余すなわち消費に対する生産の過剰のみを交換した時代もあった。」16P「なお、単に過剰のみでなく、あらゆる生産物、産業的存在が商業の手に移り、全生産物が交換に依存していた時代もあった。かかる交換の第二段階——二乗された売買価値——は如何にこれを説明すべきであろうか。」「最後に、人々が譲渡し得ないと考えていたあらゆるものが交換の対象となり取引の対象となり譲渡され得るに至った時代が来た。……………／更に、交換のこの新しい最後の段階——三乗された売買価値——は、如何にこれを説明すべきであろうか。」17P

「プルードン君の考えをよく理解して誤りなきを得るならば、その明らかにしようとするところは次の四つの点である。／第一 効用価値と交換価値とは「一つの驚くべきコントラスト」をなし、相対立するものである。／第二 効用価値と交換価値とは互いに反比例するものであり、相矛盾するものである。／第三 経済学者達は、この対立と矛盾とのいづれをも認めも知りもしなかった。／第四に プルードン君の批判は終りの方から始まる。」19P

「それ故に、交換価値と稀少さとは互いに置き換えてもいい言葉なのである。かくの如きいわゆる「極端な結論」に到達することにより、プルードン君は如何にも極端までおしやったが、そのおしやったものは事柄の内容ではなくて、これをあらわす言葉である。そしてそれによって彼が示したのは、論理よりも遙かに多く修辞である。彼が新しい結論を見

出したと考えた時、彼は最初の仮説を全く元の赤裸々な姿で見出しているのである。同じ方法によって、彼はまた効用価値と純粹の豊富さとの同視をも成しとげている。」 22P

「吾々は一方に効用（使用価値、供給）を持ち、他方に思料（交換価値、需要）を持つことになる。」 24P

「それ故に、到達し得べき結果など存在しない。そこにあるのは、いわば通約することの不可能な二つの力の間の、効用と思料との間の、自由な買い手と自由な生産者との間の、一つの闘争である。」 25P

「供給する人々の間の競争と需要する人々の間の競争とは、買い手と売り手との間の闘争に必要な一要素を形成し、そこから売買価値が生まれるのである。」 28-9P

「後に至って、これまで避けていた要素の一つ、すなわち生産費を効用価値と交換価値との総合として導いて来る手段を準備しようとしたのである。かくて同君の眼には、生産費が総合価値もしくは構成された価値を構成する。」 29-30P・・・マルクスの構成主義

## 第二節 構成された価値もしくは総合価値・・・リカードを援用したプルードン批判

「(売買) 価値は経済的建物の礎石である。」「構成された」価値は経済的矛盾の体系の礎石である。」 30P

「これが総合価値の全く出来上がっている歴史である。すなわちア・スミスにあっては漠然とした直感、ジェー・ペー・セーにあっては二律背反、プルードン君にあっては構成的で「構成された」真理、というわけである。そして誤解しないようにして欲しい。セーからプルードン君に至る他の総ての経済学者は二律背反という轍の中をはい歩いたに過ぎないのである。」 31P

「労働時間による価値の決定は、リカードにとっては、交換価値の法則である。プルードン君にとっては、それは効用価値と交換価値との総合である。リカードの価値理論は現在の経済生活の科学的解釈であるが、プルードン君の価値理論はリカードの理論の空想的解釈である。」 38P・・・物象化された相での価値法則

「以上を要約しよう。労働は、それ自身商品であるから、商品としての労働を生産するに要する労働時間によってその価値が測られる。では商品としての労働を生産するには何が必要であるか。労働の不断の維持に、言い換えれば労働者を生活させその子孫を繁殖させ得るために欠き得ない品物を生産するに要する正にそれだけの労働時間である。労働の自然価格は賃金の最低限に外ならない。」 40P・・・商品なのは労働力

「かくて、労働時間によって測られる相対的価値ということは、必然的に労働者の近代的奴隷制の公式なのであって、プルードン君が欲するように、プロレタリア解放の「革命的理論」ではないのである。」 41P

「プルードン君が二つの尺度——或る商品の生産に必要な労働時間による尺度と労働の価値による尺度——を混同していることは疑いがない。」 46P

「労働は、**労働力**は、それが売られたり買われたりする限りに於いて、あらゆる商品と同じく一つの商品である、従って一つの交換価値を持つ。」 49P——太字は「マルクスによる訂正について」で書き加えられている文。——マルクスのまだ分別されていない概念——エンゲルス序文と訳者の指摘

「商品の価値を労働によって測りながら、プルードン君は、その同じ尺度から価値を持つ

限りに於ての労働すなわち商品としての労働を除外するの不可能なことに漠然とではあるが気がついている。それは最低の賃金を直接労働の自然的正常的価格とすることであり、それは社会の現状を承認することであることを、彼は予感している。それ故に、この致命的帰結から免れるため、彼は方向転換をやって、労働は商品ではないこと、それは一つの価値を持ち得ないことを主張する。彼は、自ら尺度として労働の価値を採用したことを忘れていた。彼は、彼の全体系は商品としての労働の上に、とりかえられ売買され生産物と交換される労働の上に、最後に労働者にとって所得の直接の源泉で或る労働の上に、基づくことを忘れていた。彼はすべてを忘れていたのである。」 50-1P・・・商品なのは労働ではなく労働力、この時代のマルクスはまだ混同していた

「ここで吾々は、「構成された価値」の一つの新しい限定に到達する。／「価値は、富を構成する生産物の均衡関係である。」 51P

「プルドン君は事の順序を転倒する。彼はいう、先ず一つの生産物の相対的価値をそこに固定された労働量によって測れ、しからば供給と需要とは必然的に均衡を得るに至るであろう。生産は消費に対応するであろう、生産物は常に交換されるであろう、その日常的な価格はその価値をあらわすであろう。総ての人とともに、好いお天気には多くの人が散歩するとはいわないで、プルドン君は、自己の周囲の人々に好いお天気を保証するために先ずそれらの人々を散歩させるのである。」 52P

「(上述述べてきたところによると) **要するに**、労働時間による価値の決定、すなわちプルドン君が将来の再生の公式として吾々に示した公式は、**だから**、プルドン君より遙か以前にリカードがはっきりとあざやかに説明しているように、現社会の経済的関係の科学的表現に過ぎない。」 63P——**太字**は「**マルクスによる訂正について**」で書き加えられている文。**太字**の前の( )は書き加えられたとき消去された文。(以下、同様)

「イギリスの一共産主義者プレイ氏」の話 64-77P

「そこには、ポールの地位を獲得せんとする競争——怠惰の競争——が生じるであろう。」

74P

「最初は、生産物の交換はなく、生産に協力する労働の交換があるのである。生産力の交換様式に生産物の交換様式が依存するのである。一般に、生産物の交換形態は生産形態に対応する。後者を変更せよ、然らば前者もその結果として変更されるであろう。これ吾々が、社会の歴史に於て、生産物を交換する様式がこれを生産する様式によって規制されるのを見る所以である。個人的交換も亦、それ自身階級敵対に照応する一定の生産様式に対応する。かくして、階級敵対なくして個人的交換はあり得ない。」 76P

「プレイ氏は、正直なブルジョアのこの幻想を氏が実現せんと欲する理想たらしめている。個人的交換を浄化することにより、その中に見出される総ての敵対的要素をそれからとり去ることにより、氏はその社会に導入せんと欲する「平等主義的」関係を見出し得ると考えている。／プレイ氏は、この平等主義的關係——彼が社会に実現と欲するこの改良の理想——はそれ自身社会の反映に過ぎないこと、従ってひとつの美化された影に過ぎない基礎の上に社会を改造するの全く不可能なことを(考えない) **認めない**。この影がその実態を明かにするに従って、人々、この実体が夢想されているその変容であるどころではなくそれは実に社会の現実体であることに気がつくのである。」 76-7P

### 第三節 価値均衡の法則の適用・・・哲学と経済学を結ぶ、存命中に表に出た本

#### (イ) 貨幣

「これに反して、彼は恐らく、この関係は一つの環であってかかるものとして他の経済的諸関係の全連鎖に密接にむすびついているものであること、この関係は個人的交換と全く同様に一定の生産様式に対応するものであることを認めたであろう。しかし彼はどうしたか。彼は先ず現在の生産様式の全体から貨幣を引離し、これを後になって想像上の一列——これから再び探し出すべき一列——の最初の部分たらしめているのである。」 80P

「君主が金と銀とを占領して、彼の印を押すことによってこれを一般的交換媒介物たらしめたのであるか、或は又それらの一般的交換媒介物がむしろ君主を占領して、彼をそれらにその印を押し以て一つの政治的聖化を与えることを余儀なくしたのではないか。」

84P・・・むしろ相作性と規定性、唯物史観

#### (ロ) 労働の剰余

「彼は社会を一つの社会人間とした。」 93P・・・「社会」の人格化による実体化——物象化  
「プルドン君は、社会人間にプロメシウスの名前を与え、その偉業を次のような言葉でほめたたえる」 103P

「では最後に、プルドン君がよみがえらせているあのプロメシウスなるものは一体何か。それは社会であり、階級敵対に基礎を置く社会的諸関係である。それらの関係は、個人の個人に対する関係ではなくて、労働者の資本家に対する関係、小作者の地主に対する関係等である。」 106P

「集団的な富、公共の財産とは一体何であるか。それはブルジョアジーの富であって、個々別々のブルジョアのそれではない。そうだ！ 経済学者達は、現存する如き生産諸関係に於て如何にしてブルジョアジーの富が発展したかそしてなお増加しなければならないかを証明したに過ぎない。労働者階級に至っては、彼等の状態がいわゆる公共財産の増加の結果改善されたかどうかはなお烈しい議論のある問題である。」 107P

## 第二章 経済学の形而上学

### 第一節 方法

「今や吾々はドイツの真只中に来た！ これからは、経済学を論じつつ形而上学を論じなければならない。」 109P

「イギリス人が人を帽子に変形するとしたならば、ドイツ人は帽子を観念に変形する。イギリス人とは、富める銀行家ですぐれた経済学者たるリカードであり、ドイツ人とは、単なるベルリン大学の一哲学教授たるヘーゲルを意味する。」 109P

「最後の専制君主でフランス王国没落の代表者であったルイ十五世は、一人の医者をして傍らに侍らせていたが、この医者こそはフランスの最初の経済学者であったのである。この医者、この経済学者は、フランスのブルジョアジーの間近にせまった確実な勝利を代表していた。彼ドクトル・ケネーは、経済学を一つの科学たらしめた。彼はそれを彼の有名な『経済表』の中に要約している。この表について現われた無数の解説の外に、吾々はドクトル自身の手になる一つの解説を持つ。それは『経済表の分析』であって、それには「七つの重要な考察」がついている。／プルドン君は、今一人のドクトル・ケネーだ。それは経済学の形而上学のケネーである。」 109-10P・・・「七つの重要な考察」に照応する次の七つ



の考察？

### 第一の考察

「経済学者達は、それらの与えられた関係の下で人々が如何にして生産するかを吾々に説明する。しかし彼等が吾々に説明してくれないのは、如何にしてそれらの関係が生ずるかということ、すなわちそれらの関係を生んだ歴史的運動これである。……しかし吾々が生産的關係——範疇はその理論的な表現に過ぎない——の歴史的運動を探求しなくなるや否や、吾々がそれらの範疇の中に現実の諸関係とは独立した自主的な観念や思想しか見なくなるや否や、吾々はそれらの思想の起源を純粹理性の運動の中に求めざるを得なくなる。」 111P

### 第二の考察・・・唯物史観

「経済的範疇は、社会的生産諸関係の理論的表現であり抽象であるに過ぎない。真の哲学者としてのプルドン君は、事柄をあべこべにとって、現実の諸関係を、やはり哲学者としてのプルドン君のいうところによると「人間の非人格的理性」のふところに眠っていたそれらの原理、それらの範疇の化身に過ぎないものと考えている。／しかし経済学者としてのプルドン君は、人間が羅沙や布や絹布やを一定の生産諸関係の下につくるということを極めてよく理解している。……社会的諸関係は生産諸力と密接に連結する。新たな生産諸力を獲得するとともに、人間は彼等の生産様式を変更する。そして生産様式を、生産資料獲得方法を、変更するとともに、彼等はあらゆる彼等の社会的諸関係を変更する。」 117P

「かくて、それらの観念、それらの範疇は、そのあらかず諸関係と同じく極めて非永久的なものである。それらのものは、歴史的で一時的な産物である。／生産諸力は増大せんとする、社会的諸関係は破壊されんとする、諸観念は形成されんとする、不断の運動が存在する、恒久不変なものはただ運動の抽象——*mors immortalis*（死せざる死）——あるのみである。」 117-8P

### 第三の考察

### 第四の考察

### 第五の考察

### 第六の考察

「先には反措定が解毒剤に変わったのと同様に、措定が今度は仮定になる。」 129P

「このただ一つの公式はプルドン君の真の発見にかかるものである。それはすなわち構成された価値である。」 120P

「言いかえれば、平等がプルドン君の理想だからである。彼は、分業や信用や工業などあらゆる経済的関係は平等のためにのみ発明されたのであるがしかしそれらは結局常に平等に逆らうことになってしまったと考えている。歴史とプルドン君の擬制とが一步ごとに矛盾することから、彼はそこに矛盾があると結論する。もし矛盾があるとすれば、それはただ彼の固定した観念と現実の運動との間に存するにすぎない。」 130P

「要約すれば、平等は、社会的天才が経済的諸矛盾の圏内を経めぐりつつ絶えず眼の前に置く原初的の意図、神秘的な傾向、神慮による目的なのである。それ故に、神慮は、プルドン君の総ての経済学的知識を、彼の純粹で気のぬけた理性よりもよりよく進行させる

機関車だといってよい。彼は、租税の章につづく全一章を神慮のために捧げている。」130P

### 第七のそして最後の考察

「経済学者達は一つの奇妙なやり方をする。彼等にはただ二種類の制度——人為的なそれと自然的なそれ——しか存在しない。封建の諸制度は人為的な制度であり、ブルジョアの諸制度は自然的な制度である。彼等はこの点で神学者に似ている。」132P・・・「自然」という物象化

「この敵対的性質が明かとなればなるほど、ブルジョアの生産化の科学的代表者である経済学者達は、いよいよ彼等自身の理論と衝突するようになる。そしていろいろな学派が形成される。」136P——「いろいろ学派」①「宿命派——古典派とロマン派」②「人道派」③「博愛主義派」（「完成した人道派」——「彼等は、まじめにブルジョアの実際と戦いつつあると考えている。しかも彼等は他のどの学派よりもブルジョア階級的なのである。」138P)・・・融和主義としての「人道派」と「博愛主義派」

「経済学者達がブルジョア階級の科学的代表者なのと同様に、社会主義者達と共産主義者達とはプロレタリア階級の理論家なのである。プロレタリアが自ら階級を構成するほど未だ十分に発達していない間は、従ってプロレタリアとブルジョアジーとの闘争そのものが未だ一つの政治的性質を帯びない間は、プロレタリア解放と新社会建設とに必要な物質的諸条件を窺知せしめるに十分なほどブルジョアジーそのものの胎内に生産諸力が未だ発達していない間は、それらの理論家はただ、被抑圧階級の欠乏を予防するため諸種の制度を俄かづくりし、革新的な一科学を追い求める空想家であるに過ぎない。しかし歴史が進行するにつれて、そしてそれとともにプロレタリアの闘争が一層その姿を明白ならしめるに従って、彼等はもはや彼等の精神の中に科学を求める必要はない。彼等はただ、彼等の眼前に起る事柄を了解し自らこれが器官となりさえすればよいのである。彼等が科学を追い求め、ただ諸種の制度だけしかつづらない間は、彼等が闘争の初期にある間は、彼等は貧困の中にただ貧困を見るのみであって、旧社会をくつがえしたその革命的破壊的方向を見るに至らない。しかしここに至ったその瞬間から、歴史的運動によって作られたそして原因の十分な認識を以てこれと結合する科学は、もはや空理空論的なものではなくなり、革命的なものとなって来ているのである。」138-9P

「かくの如くにしてプルドン君は、経済学と共産主義とを批判し得たりとうぬぼれている。ところが彼はいずれもの下位に立つ。経済学者達の下位に立つのは、掌中に一つの魔術的公式を持つ哲学者として彼は純粋に経済的な諸細目に入ることを省略し得ると考えた故であり、社会主義者達の下位に立つのは、思弁的にのみでもブルジョアの水準以上に出るに十分な勇気もなければ十分な知識も持たないが故である。／彼は総合たらんと欲している。しかし、彼は一つの組成された誤謬である。／彼は科学者としてブルジョアとプロレタリアの上を天がけろうとしている。ところが彼は、資本と労働の間を、経済学と共産主義との間を絶えずゆれ動くプチ・ブルジョアに過ぎない。」139P

### 第二節 分業と機械

「分業は、プルドン君に従うと、一つの永久的法則であり一つの単純にして抽象的な範疇である。従って、又、彼にとっては抽象と観念と言葉とが歴史上の各時代に於ける分業を説明するに十分でなければならない。カーストやコルポラシオンや工場手工業制度や大

工業は、分かつという一語のみで説明されなければならない。最初に分つという語の意味をよく研究せよ、しからば諸君は、時代、時代で一定の性質を分業に与えた多数の影響力を研究するの必要を見ないであろう。」146-7P・・・廣松さんの函数的連関項的とらえ方に通じる話

(プルドンの引用)「セーは、分業に於ては利益を生ずるのと同一の原因がまた弊害を生むということを認めるところまで行っている。」142P

(プルドンの引用におけるアダム・スミス)「成熟期に達した時各種職業の人々を差異あらしめるように見えるかく異なったそれらの性質は、分業の原因というよりもむしろ分業の結果である。」142P

「文献的展望を終るに際し、吾々ははっきりと、「総ての経済学者が分業の弊害よりも利益の方をはるかに強調している」ということを否定する。それにはシスモンディの名をあげれば十分である。」144P

(プルドンの歴史)「哲学の後には歴史が来る。それはもはや、記述的な歴史でもなくまた弁証法的な歴史でもない。それは比較史である。」145P

「市場の拡大、資本の蓄積、諸階級の社会的地位に生じた変化、収入の源泉を奪われた一群の人々、かくの如きがそれぞれ工場手工業成立の歴史的条件となったのである。人々を工場に集めたものは、プルドン君のいう如く、平等者間の平和的な約束ではなかった。工場手工業が生まれたのは古いコルポラシオンの胎内からでさえもなかった。近代的工場の主人となったのは商人であって、古いコルポラシオンの親方ではなかった。ほとんど到るところ、工業手工業と手工業との間には烈しい闘争があったのである。」152-3P

「分業の大きな進歩がイギリスでは機械の発明に始まったことは、今さら想起するの必要を見ない。」155P

「プルドン君が機械の発明とその原始的応用との中に見出している博愛主義的な神慮による目的については、これを語る必要があるだろうか。」155-6P

「近代社会に於ける分業の特徴は、それが職業の専門を、専門の人々を、そしてそれとともに職業の白痴(ママ)を、つくり出す点にある。」160P

「自動装置工場に於ける分業の特徴は、そこでは労働が総ての専門的性質を失っていることである。しかしあらゆる専門的発達はやむや否や、普遍性の必要が、個人の欠くところなき発達への傾向が、感ぜられ始める。自動装置工場は専門家と職業の白痴(ママ)とを消失させる。」161P

「要するに、プルドン君はプチ・ブルジョアの理想を一步も出ていない。そしてこの理想を実現するために、彼は吾々を中世の職人仲間に、せいぜいで親方職人に引戻すこと以上の良法を他に思いつかないのである。彼はその著書の或る個所でいう、一生涯にただ一度一つの傑作をつくったならば、ただ一度人間とであることを感じたならば、十分であると。これ正に、形式からいっても内容からいっても中世のコルポラシオンの要求した傑作そのものではないか。」161P

### 第三節 競争と独占

「競争は、産業上の張合いではなく、商業上の張合いである。今日では、産業上の張合いは商業をめあてとしてのみ存在する。近代諸国民の経済生活に於ては、総ての人々が生産

することなしに利潤を得んとする一種の迷妄に捕えられる段階さえある。周期的に再現するかかる投機の迷妄は、産業上の張合いの必然性からのがれんと努める競争の真の性質を赤裸々に示している。」163-4P

「それ故に、近代的独占は一つの単なる反措定ではない。これに反してそれは真の総合なのである。／措定——競争に先だつ封建的独占／反措定——競争／総合——近代的独占。これは、それが競争制度を前提にする限りに於ては封建的独占の否定であり、それが独占たる限りに於ては競争の否定である。」170P

#### 第四節 土地所有もしくは地代

「歴史上の各の時代に於て、所有は異った仕方ですして全く異った社会的諸関係の一系列の中で発達した。かくて、ブルジョア的生産のあらゆる社会的諸関係を説明することに外ならない。／所有の定義を下すに当り、所有を一つの独立した関係、一つの別箇の範疇、一つの抽象的で永久的な観念であるかの如くに見做さんと欲することは、形而上学もしくは法律学の幻想でしかあり得ない。／プルドン君は、全く所有一般を論ずるような風を装いながら、土地所有と地代とをしか論じていない。」174P

「プルドン君のいう農夫しか存在しなかった間は、地代なるものは存在しなかった。」180P

#### 第五節 同盟と労働者団結

「これに反してプルドン君は、団結が一般的物質欠乏を惹起すべき賃金騰貴をもたらすことをおそれて、彼等に団結を禁じている。いうまでもないことであるが、職工長達とプルドン君との間にはただ一つの点については心からの一致がある。それは、賃金の騰貴は生産物の価格の騰貴に等しいということである。／しかし物質欠乏のおそれ、これがプルドン君の悪感情の真の原因であろうか。否、・・・・・・」194P

「経済学者達と社会主義者達とは一つの点で一致する。それは団結を非難することである。ただ彼等の非難は非難の理由を異にする。」195P——「社会主義者達」にエンゲルスの註があり、「それは、当時のフランスに於けるフーリエ主義者、イギリスにおけるオウエン主義者のことである。」・・・・マルクスはそもそも、「社会主義者」という言葉を空想的社会主義者やアナーキスト社会主義者を批判する時に使用していて、自らは共産主義を突き出していました。

「この闘争——真の内乱——の中に、将来の戦いに必要なあらゆる要素が結合し発達する。一度この点に達すると、組合は一つの政治的性質を帯びて来る。」198P

「幾らかの形相のみしか述べなかつた上記の闘争に於て、この大衆が相結合する、それは自ら自身のための階級を構成する。その擁護する利害は階級の利害となって来る。しか階級と階級との闘争は一つの政治闘争である。」198P

「被圧迫階級が解放され得んがためには、既得の生産諸力と現存の社会諸関係とがもはや相並んで存在し得ないということにならなければならない。あらゆる生産用具の中で、最大の生産力は革命的階級そのものである。革命的諸要素の階級としての組織は、旧社会の胎内に生じ得たあらゆる生産力の存在を前提する。」199P

「労働者階級解放の条件は、あらゆる階級の廃止である。それはあたかも第三身分（「ティエール・ゼタ」のルビ）すなわちブルジョア階層の解放の条件があらゆる身分とあらゆる階

層との廃止であったのと同じである。」 200P

「労働者階級は、その発展の道程に於て、旧市民社会に代うるに階級と階級敵対とをなくすべき一つの結社を以てするであろう。そしてもはや固有の意味の政治的権力なるものはなくなってしまう。蓋し政治権力とは正に市民社会に於ける階級敵対の公の要約なのだから。／それまでは、プロレタリアとブルジョアジーとの敵対は一つの階級と階級との闘争であり、その最高の表現に於ては一つの全体的革命となる闘争である。しかしながら、階級の対立に基礎を置く一つの社会が最後の解決としての乱暴な反対に、一つの肉体と肉体との衝突に、到達することに驚く必要があるだろうか。／社会運動は政治運動を排除するといつてはならない。同時に社会運動でない政治運動なるものは決してないのである。／もはや階級も、階級敵対もない状態になって初めて、社会進化は政治革命ではなくなるであろう。／それまでは、社会の一般的改造の各の前夜に於て、社会科学の最後の言葉は常に左の如くであろう。／「戦いか然らずんば死。血みどろの闘争か然らずんば無。かくの如くに、問題は厳として課せられている。 ジョルジュ・サンド」 200-1P・・・よく使われる、わたしも何度も使用している最後のフレーズです。今日、今日、ミャンマーのクーデターを起こした軍事政権の暴圧の中で非暴力主義の運動を担っていたひとたちが、少数民族の解放闘争に参画して武装闘争を展開しているひとたちのことを、このフレーズから想起していたのです。

## 附録

ドイツ訳に対するエンゲルスの序文・・・ロードベルトゥスのマルクスへの剽窃という批判への応答、ロードベルトゥスの労働貨幣論批判

エンゲルスは、マルクスとの協同作業において、初期においては、かなり領導的役割を果たして、マルクスに経済学的学習の必要性を提起したのはエンゲルスだとも言われています。ですが、後に深化の作業はマルクス、その解説、分かりやすい解説をエンゲルスが担うという役割分担のようなことが生まれてきました。ただ、自然科学的なことや弁証法に関する法則化というようなことにオリジナリティを發揮してはいたのですが、図式化、弁証法のヘーゲルへの先祖返りというような批判も出て、マルクスとの乖離も指摘されています。

この序文も、マルクスの解説者としての役割を十分に發揮しています。

「すなわち彼（ロードベルトゥス）は、労働、資本、価値等の経済的諸範疇を、経済学者達が彼に伝えたままの素朴な形態に於て、なんらその内容を探究することなくその外観にとらわれた形態の下に、採用しているのである。かくて彼は、六十四年来しばしば繰返されたそれらの命題から初めて何物かをつくり出したマルクスと反対に、ただにそれらの範疇をより完全に発展させるあらゆる手段を自ら禁じたのみでなく、後述の如くユートピアへと真すぐに進む道へと入りこんだのである。／労働者に対して彼等の生産物たる社会的生産の全体は彼等のみかその真の生産者たるが故に彼等に属すると説くリカード理論の前述の適用は、まっすぐに共産主義へと導いて行く。しかしながら、これが亦マルクスが上記の箇所を示しているように、それは経済学的にいうならば形式上誤っている。何故なら、それは単に道徳を経済学に適用したものに過ぎないから。」 208-9P

「これ蓋し、その著書の第一行から彼はまっすぐに労働貨幣のユートピアへと直行し、価

値形成者としての労働に対するあらゆる分析はその途上に越え難き暗礁を撒布せざるを得なかったからに外ならない。彼の本能は、ここでは彼の抽象力より遙かに強かったのである。なお序でにいうが、抽象力なるものはロードベルトゥスにあっては思想の最も具体的な貧弱さに依ってのみ見出されるのである。」 214P

（註として）「恐慌に先だつ一般的好況期は必ずしも常に現われないであろう。もしそれが現われない場合には、軽微な変動を伴う慢性的な沈滞が近代的産業の正常状態となるに至るであろう。」 220P

「従って、ロードベルトゥスが労働貨幣ユートピアで持ち出ししている何等か新しいすべてのものは、子供らしいものであり、彼の前に出たものたると後に出たものたるとを問わず彼の多くの競争者達の業績に比し遙かに劣ったものである。」 223P

「何故なら、彼は最初からリカードの他の方向——ユートピアの方向——へと発展させて行ったのだから。かくて、それはあらゆる批判の条件たる不羈独立性を失うことを意味する。そこでロードベルトゥスは、予め定められた目標を抱いて研究に従事した。彼は一種の傾向ある経済学者となった。一度びそのユートピアに囚われると、彼は科学的進歩のあらゆる可能性を自ら遮断してしまった。一八四二年からその死に至るまで、彼は同じ圈内をぐるぐる廻り、既に彼以前の諸著作中に明示又は暗示されたのと同じ思想を繰返し、人から無視されたと感じ、剽窃すべき何物も存しないのに剽窃されたと考え、そして最後に、結局彼の発見したものは既に遙か以前に発見されたものに過ぎないという明かな事実故意に目を閉じていたのである。」 224P

「本書に於ける用語が必ずしも常に『資本論』のそれと一致しないのは、ほとんど注意する必要を見ない。本書ではまだ労働力といわないで商品としての労働とか労働の購買及び販売とかいっている。」 224-5P

#### カール・マルクスの観たプルードン

マルクスの『哲学の貧困』以前に書かれたプルードン批判、簡潔なプルードン批判です。「彼がその著書を知っているフランスの社会主義者達や共産主義者達はもちろん、いろいろな見地から財産を批判していたのみでなく、これを空想的に止揚していた。彼の著書の中でのプルードンのサン・シモンとフーリエとに対する関係は、ほぼフォイエルバッハがヘーゲルに対する関係に等しい。ヘーゲルに比べるとフォイエルバッハは極めて貧弱である。しかし、ヘーゲル以後に於ては、彼は一時期を画した。何故なら、彼は、キリスト教的良心にとっては不愉快で哲学的批判の進歩にとっては重要な然しヘーゲルによって神秘的な明暗の中に残された諸点をはっきりさせたからである。」 227-8P

「経済学の聖堂に彼が手をかける際の挑戦的な大胆さ、ブルジョアの平凡な常識を嘲弄する際の機智に富む逆説、その骨を刺すような批判、その辛らつな皮肉、あちこちに見られる現存秩序の醜汚に対する深く真実な反抗感情、その革命的精神、かくの如きが『財産とは何か』の読者を感激させ、この書の出現以来一つの強力な衝動を与えて来たものなのである。厳密に科学的な経済学史に於ては、この書はほとんどその名をあげるにも値しないであろう。」 228P

「しかし、彼の偶像破壊者的態度にも拘らず、既にこの最初の著作の中に、吾々は、プルードンが一方に於てはフランスの小農(後にはプチ・ブルジョア)の見地から又小農の眼を以

て社会を批判し、他方に於ては社会主義者達が彼に伝えた標準を社会にあてはめるとい  
あの矛盾を見出すのである。」 229P

「プルドンはそれらの経済的諸関係の全体を財産の法律的概念に従属させたので、彼は、  
一七八九年以前にブリッソによって同じような語「財産とは盗奪である」によって与えら  
れた答え以上に進むことが出来なかったのである。」 230P

「すべてのこれらのことから引出し得る結論は、盗奪に関するブルジョアの法律的概念  
はその正直な利潤にも亦よくあてはまるということである。他方に於て、盗奪は財産の侵  
害たる限りに於て、財産を前提としているので、プルドンは、真のブルジョア財産につ  
いてのあらゆる種類の混乱した架空の概念の中にもつれこんでいるのである。」 230P・・・  
プルドンは感性的に「財産とは盗奪」と押さえた。マルクスはそれを「労働」と「労働  
力」という概念で分析し、その秘密を「搾取」という概念で解き明かし、理論化した。

「一八四四年、私がパリに滞在していた頃、私はプルドンと親交関係を結んでいた。私  
がそのことを思い出すのは、彼の「ごまかし」（「ソフィスティカシオン」のルビ）——イギ  
リスが或る商品の偽造を示すために用いる言葉——には或る程度まで私に責任があるから  
である。しばしば夜を徹して行われた長い議論の中で、私は彼にヘーゲル主義を注ぎこん  
だ。非常に不利なことには、ドイツ語を知らないので、彼はヘーゲル主義を徹底的に研究  
し得なかったのである。」 230P

「しかしまもなく忌憚のない批評は彼の上に（私の『哲学の貧困』パリ、一八四七年の中  
で）加えられた、そしてそのため吾々の友好関係は永久に終りを告げたのである。」 231P

「実に、プルドンは、この書物を出版した後に、初めて彼の経済学の研究を始めたので  
あった。彼は、彼の提起した問題を解決するためには、罵言によってではなくて近代経済  
学の分析によって答える必要のあったことを発見したのであった。」 231P

「すなわち、経済学的諸範疇を物質的生産関係の一定の発展段階に照応する歴史的生産関  
係の理論的表現として考察する代わりに、彼の想像力はそれらを一切の現実に先立って存  
在する永久的諸観念に変形し、かくして、一回りして彼はその出発点たるブルジョア経済  
学の見地に戻っているのである。」 232P

「それから私は、彼がその批判を企てた経済学の彼の知識が如何に欠陥多く幼稚なもので  
あるか、歴史的な運動——社会解放の物質的諸条件をそれ自身作り出すべき運動——の批  
判的知識から科学を引出すことをしないで、彼が如何に空想家とともに、「社会問題の解決」  
のため全く出来上がった形式を彼に提供するような一つの所謂「科学」を探求しようとし  
たか、を示したのである。」 232P

「彼は公式を探し求める人間である。かくの如くしてプルドン君は、経済学と共産主義  
とを批判し得たりとうぬぼれている。ところが彼はいずれもの下位に立つ。経済学者達の  
下位に立つのは、掌中に一つの魔術的公式を持つ哲学者として彼は純粋に経済的な諸細目  
に入ることを省略し得ると考えたが故であり、社会主義者達の下位に立つのは、思弁的  
のみでもブルジョアの水準以上に出るに十分な勇気もなければ十分な知識も持たないが故  
である。／「……彼は科学者としてブルジョアとプロレタリアとの上を天がけろうと欲し  
ている。ところが彼は、資本と労働との間を、経済学と共産主義との間を絶えずゆれ動く  
プチ・ブルジョアに過ぎないのである。」 233P

「しかし、忘れてはならないことは、私がプルードンの著書はプチ・ブルジョア社会主義の經典に過ぎないことを宣言し且つ理論的に証明した時、正にその同じプルードンが当時の経済学者達と社会主義者達とから一斉に烈しい革命家として呪われていたということである。」 233-4P

「実際、二月革命はプルードンにとっては極めて都合の悪い時に勃発した。というのは、彼はその二、三週間前に「革命の時代」は永遠に過ぎ去ってしまったことを駁論され得ないまでに正に証明したばかりであったから。しかしながら、国民議会に於ける彼の態度は、称讃にのみ値するものである。」 235P

「しかし利付資本を資本の主要形態なりと考えること、しかし信用の特殊の応用いわゆる利子廃止を社会変革の基礎たらしめようと欲すること——これこそ全く一つの小商人的な空想である。それ故に、既に十七世紀のイギリスのプチ・ブルジョアジーの経済学的代表者に於て、かかる空想が熱情もて刻苦作成されているのを見出すのである。利付資本についてのバステアとプルードンとの論争(一八五〇年)は、『貧困の哲学』よりも遙かにまづいものである。彼はバステアによってさえも完全にたたかれている。そして彼の論敵が彼に一撃を加える度毎に滑稽な様子で叫んだりわめいたりしている。」 236P

「数年前にプルードンは、租税に関する一つの論文を書いた。たしかヴォー県庁が募集した懸賞論文であったかと思う。この論文では彼の天才の最後のひらめきは消え失せていて、彼は全くまじりけのないプチ・ブルジョアでしかなくなっている。」 236P

「しかしながら、宗教と教会とに対する彼の攻撃は、フランスの社会主義者達が彼等の宗教感情を十八世紀のヴォルテール主義と十九世紀のドイツ無神論とに対する一つの優越として自負していた時代にあつては、一つの大きな地方的功績を持っていた。」 237P

「もはや単に悪書とのみ考え得ないで全く卑劣な行為と考えられるもの——しかしながらプチ・ブルジョアの精神とは完全に一致したもの——は、それはクーデタに関する書物——その中で彼はルイ・ボナパルトにこび、ボナパルトをフランスの労働者をして支持せしめんと努力している——であり、反ポーランド的な書物——そこではツァーに敬意を表して白痴（ママ）のような破廉恥を以てポーランドを論じている——である。」 237P

「人はしばしばプルードンをジャン・ジャック・ルーソーに比較して来た。これ以上の誤りはない。彼はむしろニコラ・ランゲ——その『民法の理論』はしかし一つの天才的な著作である——に似ている。」 237P

「プルードンの性格は彼を弁証法に赴かせた。しかし科学的弁証法を決して理解したことはなかったので、彼は詭弁に到達したのみである。実に、このことは彼のプチ・ブルジョアの見地から生じている。プチ・ブルジョアは、わが歴史家ラウマーと全く同じく、常にあちら側から論じたりこちら側から論じたりする。相反し相矛盾する二つの流れが彼の物質的利益を、従って彼の政策を、彼の宗教的科学的美的見解を、彼の道徳を、要するに彼の全存在を支配する。彼は生ける矛盾である。それのみでなく、彼がプルードンの如く一人の才人である場合には、彼はやがて彼自身の矛盾をごまかし、それを事情に従い奇抜できざでしばしば派手な逆説までつくりあげる。科学的瞞着と政治的妥協とは、かかる見地から相反し相矛盾する二つの流れが彼の相分ち得ないものである。そこにはもはやただ一つの動機すなわち個人の虚栄心しか残っていない。そして総ての虚栄の徒に於けると同じ



く、その瞬間の効果、その日の成功しかしかもはや問題にならない。従って、例えばルソーの如き人をあらゆる現存権力との妥協から——外見上の妥協さえから——救った単なる道徳的触感は必然的に消失する。」 237-8P

「恐らく、後世の人々は、フランス史のこの最近の時代の特徴を示すために、ルイ・ボナパルトはこの時代のナポレオンであった、プルドンはこの時代のルーソー・ヴォルテールであったということであろう。」 238P

#### マルクスの著作「経済学批判」ベルリン、一八五九年からの抜粋（六一—六四頁）

ジョン・グレイの労働貨幣論批判の文・・・労働貨幣論は労働価値説という物象化された資本主義的生産の論理から抜け出せていない。

#### アネンコフ宛のマルクスの手紙

小引・・・訳者作成

「それは、弁証法的な考え方と科学的な批判との立派な模範であって、内容から見て『哲学の貧困』の序説と云って差し支えない。」 245P

アネンコフは、「ロシアの文学者。海外で生活することが多かったので、マルクスと知り合い、友人となった。この友人関係以外には彼は社会主義と何等の関係も持たなかった。」（訳者註（一二九） 287P）

本文の抜き書きメモ

「プルドン君は、彼は今日の社会状勢をその engrènement 噛み合い（関連）に於て理解し得ないから一つの荒唐無稽な哲学理論を吾々に与えるのである。」 248P

「何故にプルドン君は、決して誤ることのない。そしてあらゆる時代を通じて同一であり、真理を知るためにはそれについて正しい意識を持つのみで足るところの、神、普遍的理性、人類の非人格的理性、について語るのでしょうか。何故に彼は、自らに自由思想家の外観を与えるために、薄弱なヘーゲル主義をつくり出すのでしょうか。」 248P

「人間は、彼等自身で社会のこの形態或はあの形態を自由に選択することが出来るのだろうか。決して出来ない。もし人間の生産諸力に於ける一定の発展段階を仮定するならば、吾々は交易と消費との一定形態を得るであろう。もし生産と交易と消費との一定の発展段階と仮定するならば、吾々はこれに対応する一定の社会的秩序、これに対応する一つの家族や身分や階級の組織、一言でいえばこれに対応する市民社会を持つであろう。もし一定の市民社会を仮定するならば、吾々は市民社会の公的表現に過ぎない一定の政治的状态を得るであろう。プルドン君はこのことを全然理解しない。彼は、国家から社会へ——言いかえれば、社会の公的要約から公的社会へ——と訴えることにより何か偉大な事でもなしとげたかの如くに考えているのだから。」 249P

「人間が彼等の生産諸力——人間の全歴史の基礎であるところのもの——を自由に選択することが出来ないのは、ここに付言する必要を見ないであろう。何故なら、一切の生産力の一つの獲得された力であり、従来の活動の産物であるからである。」 249P

「人間の社会的歴史は、彼等が意識していると否とを問わず、彼等の個人的発展の歴史以外の何物でもないのである。彼等の物質的諸関係が総ての彼等の関係の基礎である。それらの物質的諸関係は、彼等の物質的個人的活動がその中で実現される必然的形態に過ぎない。」 250P・・・唯物史観

「プルードン君は観念と事物とを混同する。人間は決して彼等の獲得したものを抛棄しはしない。しかしこのことは、人間がその中で一定の生産諸力を獲得した社会的形態を決して抛棄するものではないということを意味しない。」 250P

「彼は、十七世紀、十八世紀又は十九世紀について語ることを必要だとは感じない。何故なら、彼の歴史は朦朧とした想像の王国の中で進行し、時空を超越して起るからである。要するに、それは歴史ではなくて陳腐なヘーゲル主義（「ヴィエーユリ・ヘーグリエンヌ」のルビ）である。」 251-2P

「永遠の理性の経済的諸進化の系列」——①「分業から始まっている」 252P②「第二の進化は機械である」 253P③「第三の進化として、機械に対する反措定として、競争という化物を魔法で出現される時如何に機敏に振まうかを！」 254-5P④「最後に、プルードンの体系に於ける最後の範疇をなすものは財産である。」 255P

「すなわち彼は、彼が総てのブルジョア的生産形態を結びつけている紐帯を把握していないこと、或る一定の時代に於ける生産形態の歴史的なそして過渡的な性質を理解していないこと、を明かに示している。プルードン君は、吾々の社会的制度を一つの歴史的産物とは考えず又それらの起源と発展とのいずれも理解しないので、それらの独断的な批判をなし得るに過ぎないのである。」 256P

「プルードン君は又、発展を説明するためにも一つの仮説に逃げ場を求めるのやむなきに至っている。……彼は、君に対して、矛盾はただ彼の固定した諸観念と実際の運動との間に存在するに過ぎない事実を隠すのである。」 256P

「彼は、経済的諸範疇はそれらの現実の諸関係の抽象的表現に過ぎないのであって、それはそれらの諸関係の存在する限りに於てのみ真であることを理解していない。それ故に彼は、それらの経済的諸範疇を永遠なるものと考え、一定の歴史的発展——生産力によって決定される一つの発展——にとつてのみ法則であるところの歴史的法則とは考えないブルジョア経済学者達の誤りに陥っている。」 256-7P

「しかし、実際の生活に暫し眼を向けて見給え。現時の経済生活に於て、君は単に競争と独占とを見出すのみでなく、又一つの公式ではなくて一つの運動であるそれら両者の総合をも見出すであろう。独占は競争をつくり出し、競争は独占をつくり出す。」 258P

「彼が理解しなかったことは、これらの人間が、その中で彼等が布やリンネルを生産する社会的諸関係をも亦その能力に応じて作り出すということである。更に一層彼の理解しなかったことは、彼等の物質的生産方法に応じて彼等の社会的諸関係を形づくる人間は又、諸観念と諸範疇すなわちそれらの同じ社会的諸関係の抽象的観念的表現をも形づくるということである。」 260P

「かくて、範疇として見られた経済的諸関係は、プルードン君にとっては、起源も進歩もない永遠の形式である。」 260P

「彼は、ブルジョア社会の産物を、それらが彼の心に範疇の形で、思想の形で、現われるや否や、それ独特の生命を持つ独立の永遠的存在であるかの如くに思いこむ。それで彼は、ブルジョアの水準以上に出ることがない。彼は、その永遠の真理なることを前提としているブルジョア的観念を取扱っているので、彼はそれらの観念のために一つの総合、一つの均衡を求める、そして現在それらが均衡に達している仕方が可能な唯一の仕方なることを

見ないのである。」 261P

「彼等は、その中では人間がもはやブルジョアでなくなっている一つの社会を考えることが出来ないのである。／プルドン君はそれ故に必然的に一人の空論家である。」 262P

「プルドン君は、永遠の諸観念、純粹理性の諸範疇を一方に置き、彼に従えばそれらの諸範疇の適用である人間とその実際生活とを他方に置くが故に、吾々は彼に於て、初めから、生活と観念との、精神と肉体との二元論、多くの形式の下に繰返し現われる二元論、見出すのである。君は今や、この敵対は、彼の神化する諸範疇の世俗的な起源と歴史とを理解する力がプルドン君にないことを示す以外の何物でもないことを知り得たであろう。」 263P

「僕がプルドン君と完全に一致するただ一つの点は、感傷的な社会主義的白日夢を彼が嫌っている点である。」 264P

「頭の天辺から足の爪先まで、プルドン君はプチ・ブルジョアジーの哲学者であり経済学者である。」 265P

## 映像鑑賞メモ

たわしの映像鑑賞メモ 067

### ・ラウル・ペック監督「マルクス・エンゲルス」フランス 2017

「マルクス・エンゲルス」は、四人が軸になって描かれている映画です。マルクスとパートナーのイエニー、エンゲルスとその恋人を人間的に浮き彫りにさせています。

1943年くらいから「共産党宣言」を出したころまでを時代情況とこれらのひとの思想性とその生活における葛藤のようなことも描いています。

尖ったつぎつぎに衝突を繰り返していくマルクスという評価があるのですが、マルクスは困窮生活の中で、思想的に煮詰めていく作業において、労働者階級に依拠するという立場性を獲得し、周りのひとびとと衝突せざるを得ない側面をわたしは読みとっていました。青年ヘーゲル派のブルーノ・バウアーへの「批判的批判」への批判、プルドンやルーゲ、正義者同盟（義人同盟）のヴァイトリングとの決別などいろんなエピソードが出てきます。

書記的役割を担い、いろいろ提言していたイエニー像も出ていて、そもそも貴族階級の娘として生まれ、熱愛の中で、出身階級の予期される「退屈な生活」を棄てて、困窮の生活を送ることになるのですが、まさにマルクスのパートナーとして生きた生涯。次の次ぎの鑑賞メモの「ミス・マルクス」が課題にしているフェミニズム的観点とも繋がるような内容をもっているのですが、ここではフェミニズム的なことは出てきません。

エンゲルスは、父親がブルジョアで、自分の出身階級と思想性の間の矛盾に苦しんでいたのですが、アイルランド人の労働者階級出身の恋人メアリー・バーンズとの関係もこの映画の中で描かれています。メアリー亡き後、エンゲルスとパートナー関係になる妹も登場しています。エンゲルスは、既成の観念のようなことから離脱しようという自由人的な雰囲気が出ています。

マルクスとエンゲルスの関係は、最初エンゲルスの方がマルクスにさまざまな刺激を与

えていたのですが、後に、マルクスが思想的深化を担い、エンゲルスが解説なり・広げる作業、そして新しい分野を対象化していくという分業のようなことが成立していました。このあたりは廣松渉さんの分析です。

エンゲルスは、自らの差別意識というところではかなり自由さ・差別的観念からも自由だったようなのですが、理論的には差別の構造から抜け出していく理論的深化をなしえないうままでした。また、分かりやすく解説していく過程で図式化にも陥っています。

この映画最初に見たときは、実像とかけ離れているというような感想をもってしまっていたのですが、マルクスの最初期の論文「木材窃盗取締法にかんする討論」を彷彿とさせる映像から始まります。それまでにあった入会権を奪うような私的所有権を前面押し出した民衆への弾圧を描き労働者のおかれていた苛酷な状況から始まっているのです。さまざま周りのひとたちとの論争の中で、自分たちの運動の流れを形成していく様が、丁度、このメモと同時掲載する読書メモの『哲学の貧困』の再読と重なり、トレースできました。

社会変革運動のもっとも基調的なことを突き出したひとたちを描いた映画、その基調的なところの、読み直しと深化が問われている時、感慨深く見ていました。

#### たわしの映像鑑賞メモ 068

##### ・マルガレーテ・フォン・トロッタ監督「ローザ・ルクセンブルク」ドイツ 1986

このビデオは、ローザ・ルクセンブルクの連続学習をしているところにその存在を知って、その時から探していて、間違っ字幕のついていないビデオまで買ったのですが、よく分からないままでした。字幕版がビデオオンデマンドで上がっていて、やっと観れました。書簡や評伝的なことを読んでいて、いくつもの印象的な記述が、映像になっています。たとえば、刑務所内で観た、「野牛」がムチ打たれるシーンとか、第一次世界大戦突入で、ドイツ社民党国会議員が総崩れになって戦争公債に賛成票を投じたときに、その後の集会でショックで演説ができなかったというシーンなど。

ローザは権力側からは「鉄の女」「血塗られたローザ」とか「魔女」的に描かれることがあったのですが、運動の原理・原則を貫くひとだったのですが、文化・芸術というところでは知識人的な小ブル文化へのとらわれもあり、迷い・悩みながら、そして体調を崩しながら、それでも、インターナショナリズムを貫く革命の闘士であり、そして革命のただ中で、虐殺されたのです。そんなローザを歴史資料に忠実に描こうとした作品です。

だいたい得ている情報だったのですが、ひとつだけわたしの知らなかったことがあります。それはローザを虐殺した被告人の裁判の資料から出ている情報だと思うのですが、ローザは、銃座で殴られた後、銃殺されているのですが、その瞬間「殺さないで」とつぶやくようなシーンがあります。ローザは思想的にはインターナショナリズムを貫き通した信念のひとですが、それでも、迷いながら闘っていたという側面をもっていたのでしょうか？

レーニンのローザ批判があり、そこではローザ自身が自己批判し訂正したというような記述もあるのですが、確かに「ロシア革命論」で展開していたボリシェヴィキ批判を、ドイツ革命の敗北的予期の中で、「成功したロシア革命と敗北が予期されるドイツ革命」という中で、自己批判的にとらえ返していたというようなことはあったようなのです。です

が、当のレーニンのローザ批判は、今日的に見ると、レーニンが批判しているような内容はことごとく覆されます。

ローザの原則主義的展開は、そもそもマルクスの突き出した共産主義概念に、今日の反差別的地平を織り込むと、わたしは共産主義とは何かというとき、①インターナショナルイズム②運動の中での関係性が、目指す社会の関係性を示していること③差別的意識からの「自立」——離脱、という内容で提起できるのではないかと思います。これに照らすと、スターリンは元より、レーニン、トロツキーよりも、ブレがありつつもローザ・ルクセンブルクがより近い存在であり、とりわけその「継続的本源的蓄積論」が反差別共産主義論として取り込み得る内容をもっているのだとわたしは押さえています。

そういうことを改めて感じさせた映画でした。

たわしの映像鑑賞メモ 069

#### ・スザンナ・ニッキヤレリ監督「ミス・マルクス」イタリア・ベルギー合作 2020

実は、この作品は日本の映画館で昨年の秋劇場公開されていたのですが、見逃してしまいました。実は前のメモ二つの映画がビデオオンデマンドにアップされているのを観ていて、これも見つけたのです。

これはマルクスの末娘エリノア・マルクスの半生を描いた映画です。

ウィキペディアでエリノア・マルクスの項目があり、父のマルクスやパートナー関係にあったエドワード・エイヴリングに「搾取された」とかいう言葉があったのですが、「搾取」という概念を使うのはズレているとは思いますが。ただ、当時の時代状況からして、マルクスの連れ合いのイエニーが秘書的な役割を担っていたのを引きついで、というところで、何故「秘書」的な役割なのかという問題があります。理論的にも運動的にも姉妹の中で、マルクスの思想性を一番引き継げるようだったようです。そしてイエニーの亡き後、後を追うように長女のジェニーを亡くし、またマルクスも没したのですが、その後、運動的にかなり表にでていくのですが、連れ合いのエドワード・エイヴリングが金銭感覚のない浪費家で性的なことにも問題のあったところでの葛藤とかも含めて、この映画はエリノアの独り言のような独白があるのですが、父からエドワード・エイヴリングからの抑圧のようなことを題材にしていて、まさに左派のフェミニズムの走りのひとだったことが描かれています。

また、この映画は、イエニーがマルクスと結婚するとき実家から連れてきた以来の家事と秘書的なことも担ったヘレーネ・デムートとの間に子どもを作っていたということを秘密裏にエンゲルスが里子に出していたこと、それがエンゲルスの子と噂されていたことを、死ぬ間際に事実を明かし、エリノアがショックを受けたという場面も出てきます。エンゲルスが死後散骨させた話もこの映画で出ていた自由人さがあったのですが、理論的にはマルクスが反差別論的には踏み込んでいく可能性を見せていたことと交叉のようなこと、いろいろ考えさせる映画にもなっています。

この映画は、ロック的なバッググラウンド・ミュージックがあり、エリノアのダンスシーンなどもあり、かなり創作的な要素が強かったのですが、それらのことも含めて制作側の

特にフェミニズム的なところを突き出した映画になっています。

エリノアは自死したのですが、さて、この映画から離れるのですが、二女のラウラも「社会主義者は老年になってプロレタリアのために働けなくなったら潔く去るべきだ」で連れ合いのポール・ラファルグと一緒に自死しています。このあたり、初期社会主義者が優生思想にとらわれ推進者になったりした、その死生観なり、人間観なりが、いまひとつ深化できていない、今もまだそうなのですが、飛躍的なことが今必要になっているのではないのでしょうか？

こんなことを書きながら、エリノアが、その連れ合い関係にあったエドワード・エイヴリングこと、周りのひとみんなから嫌われ、「分かれなさい」と言われているのに対し、彼のことを「道徳心がない」として、それは「目が見えないとか、耳が聞こえないということと同じだ」というようなことを発言していたことを違和感を抱いたこととリンクしていきます。たとえば、医学モデル的に「発達障害」という概念、実はこれは「役割期待——役割遂行」ということにおける「役割障害」ということでとらえれば、確かに「同じ」「障害」なのですが、そのあたりは、医学モデルではなく、関係論的な関係の結び直しを考えると、必ずしも「同じ」ではないのではとも思えます。エリノアの死は、そこまでとらえ返しができなかったところでの絶望的な死になってしまったのだと思えるのです。

この映画はエリノアがフェミニズム的課題を抱えさせられていて、フェミニズム的なところに一部踏み込んだその半生を描いたまさにフェミニズム映画です。

## インターネットへの投稿から

2022.5.20 情報・コミ保障法に関する投稿へのリツイート

[障害がある人が情報得やすくする法律 衆院本会議で可決・成立 | NHK](#)

という事へのツイートへの応答文

一步前進なのでしょうが、義務ではなくて責務なのですね。児童扶養手当の広報義務で争って最高裁までいった「聴覚障害者」が当事者の裁判で、敗訴したことがあったのですが、それが責務というごまかしだったのです。責務では「福祉」は恩恵としての福祉になってしまいます。先が長いですね

この文は即応答文で、その後また考えていました。その後、「反障害通信」読者各位に発した文

各位

情報コミュニケーションに関わる情報で、そのことに関わるひと限定でメールしようかと思っていただいたのですが、広く知って欲しいので、みんなに流しておきます。

SNSでこの情報が流れていました。元はNHKです。

NHK

[障害がある人が情報得やすくする法律 衆院本会議で可決・成立 | NHK](#)

インターネットで検索したのですが、他のマスコミでは

毎日

[情報格差、命の危険も 障害者支援法成立で真のバリアフリー進むか | 毎日新聞 \(mainichi.jp\)](#)

これは有料記事です。全部見れません。図書館で新聞を当たってみます。他のマスコミ

ミで取り上げているのをまだ見つけていません。

このことでロビー活動をしてきた全日ろう連がきっと日聴紙6月号でとりあげると思います。

わたしが留目したのは、NHKの記事の「責務」という言葉です。実は、わたしが傍聴支援をしていた、児童扶養手当の広報義務を争った裁判、最高裁まで行ったのですが、その「義務」を「責務」という言葉にすり替え、行政・立法の不作为の問題を裁量権の問題として原告敗訴にしたことがあります。で、今回の法律、立法の不作为の解決としての法律化でもあるのですが、その条文で「責務」という概念を使ったら、不作为の上塗りになるのではないのでしょうか？ 裁判をすると判例を覆す判断が出ない限り敗訴します。実は、これは福祉は権利か恩恵かという内容で争った裁判なのです。裁量権ということで、結局「判断」は明文化されず、「裁量権」ということの中身的に「恩恵」というところに落とし込まれたのではと思っています。

この問題は、続報とともに後で「通信」でとりあげます。心動いたひとのアクションも期待しています。

## HP 更新通知・掲載予定・ブログのこと

◆「反障害通信 120号」アップ(22/6/18)

◆メインの「反障害——反差別研究会」のホームページ不備・校正があり、かなり大幅な更新をしました。今号の最後に掲載している、「Ⅲ.「会」の当面の研究・執筆課題(2022.5全面改定)」を新たに書いています。ホームページ校正したところは、ホームページを見てください。訂正箇所はしばらく赤字にしています。

◆「反差別資料室 A」「反差別資料室 C」も DVD などの他のメディアでの郵送などで対処したいと思っています。横書き版は最後、の連絡先から連絡をお願いします。

◆「反差別資料室 C」で、また見れない文書が出ています。とりあえず、タイトルの最後に「反障害通信」の掲載号数を書いていますので、メインホームページの「会報」の当該通信号から見てください。

◆「反差別資料室 C」の「文献室」を、新しい本の購入や読書に合わせて、一年ぶりにリアップしました。

## (編集後記)

◆今回は、なんやかんやで文が膨らみ、やや多めになってしまいました。

◆巻頭言は、「そもそも」シリーズで、「民主主義」をとりあげました。前号と同じく、民主主義で議論してたひととの対話のまとめ的な意味も持っています。また、維新のファシスト的性格というところで、新自由主義的な維新がなぜファシズム的勢力になるのかという自己内疑問を解いたという内容ももたせました。

◆読書メモは、マルクスの『ユダヤ人問題によせて ヘーゲル法哲学批判序説』と『哲学の貧困』です。『哲学の貧困』はアナーキズムとの対話とマルクスの哲学から経済学への架橋とか、唯物史観の論攷としての学習、わたしとしては、初期に読んでほとんど頭に残っていなかったの、押さえるための再読の本です。思ったよりも重要性を感じて、かなりの

分量の読書メモになってしまいました。これはオンデマンドでたまたま観た「マルクス・エンゲルス」「ローザ・ルクセンブルク」「ミス・マルクス」という映画の映像鑑賞メモとかなりリンクしました。今、マルクスの再学習を本格的にやっているのではなく、課題的に必要になっているところをピックアップして読んでいて、映像もたまたま目にとまったので見たのです。次回の読書メモは反原発関係の本2冊と障害関係論関係の本までを取り上げられるかどうか。

- ◆「映像鑑賞メモ」は、マルクスとその流れのひとつたちの伝記的映画をとりあげました。
- ◆「インターネットへの投稿から」は、5月20日に情報・コミ保障法が国会で全会一致で通りました。それを紹介したSNSへの投稿に反応した投稿です。実は自分で書いた「一歩前進」という文に疑問が膨らみました。このことで、「通信」読者に速報を送りました。これも取り上げています。斜文字は投稿文にない解説です。これらのことは後でまとめた文にします。
- ◆「インターネットへの投稿」後、「朝日新聞」、「東京新聞」の記事を見つけました。新聞の切り抜きをコピーしたので、欲しい方は連絡ください。デジタル版のURLを貼りつけます。「東京新聞」はデジタル版は発見できませんでした。毎日是有料記事、朝日は？

#### 「障害者情報アクセシビリティ・コミュニケーション施策推進法」

全日本ろうあ連盟

[全日本ろうあ連盟 » 障害者による情報の取得及び利用並びに意思疎通に係る施策の推進に関する法律（障害者情報アクセシビリティ・コミュニケーション施策推進法）成立に寄せて \(ifd.or.jp\)](#)

・「朝日新聞」 [障害者の情報格差、解消向け国に責務 法成立：朝日新聞デジタル \(asahi.com\)](#)

・「毎日新聞」 [情報格差、命の危険も 障害者支援法成立で真のバリアフリー進むか | 毎日新聞 \(mainichi.jp\)](#)

NHK

[障害がある人が情報得やすくする法律 衆院本会議で可決・成立 | NHK](#)

[障害がある人が災害などの情報得やすくする法律成立 | NHK 政治マガジン](#)

◆岸田政権は「新しい資本主義」を突き出しています。どうも、成長ばかりではない、成長と分配のバランスを考える、もう少し分配も増やすとか、いう話のようです。もうひとつ、「自己責任」というところを強調する新自由主義的なところからの修正的なところを突き出したいようなこともあるようです。ですが、そもそも、多数派の安倍派の意向に「聞く耳をもつ」ところでご機嫌伺いをしている状況でそんなことを突き出しても、「口先だけの言うだけ、やっているふりの事なかれ政治」にしかありません。そもそも資本主義の現在的情況が、どうなっているのかの情况分析ができていのでしょうか？ 資本主義のグローバル化は90年代中期には世界を覆ったと言われていました。そういう中で、世界資本主義は、周縁国からの収奪の構造に限界が出て、中枢国での中間層の没落と貧困層の拡大と更なる落とし込めに入っているのです。その状況が押さえられないから、岸田政権は「中間層の拡大」なるスローガンを出しているのです。安倍元首相は、「世界一企業が



活動しやすい国」というスローガンを出していました。それが、目先の利益しか考えない資本主義の原理的精神です。そのことを反発を受けるなかで、保守に回帰したとされる岸田カラーを突き出そうとしたのでしょうが、所詮、あやつり政権か「口先だけの言うだけ、やっているふりの事なかれ政治」にしかありません。憲法改正の作業に道筋をつけるというところで、右派政治、ファシズム的なところで飲み込まれていく恐れが大きくなっています。ごまかしの政治に乗らないきちんとした情况分析が、今必要になっています。

## 反障害—反差別研究会

### ■会の方針

「障害学において、「障害とは何か」という突き詰めがなされないまま、議論の煮詰めもなされないままでした。そこから起きる混乱が、「障害者運動」の方向性を見出していく作業を妨げていました。イギリス障害学が障害の医学モデルから「社会モデル」への転換をなそうとしました。しかし、もう一段掘り下げた作業をなしえぬまま、医学モデルへの舞い戻りという事態が起きているようです。また、各国で差別禁止法とか「解消法」が作られています。そこでのモデルは結局医学モデルでしかない状態です。この「会」でやろうとしている議論・研究は、障害問題を解決していくための「障害者運動」のための理論形成の作業です。「会」としては「社会モデル」から更に、関係モデルへの転換を提起しています。実は、日本の「障害者」の間では、既にこの議論を先取りするような議論もなされていました。そのことが整理されないままになっています。改めてそれらのこともとらえ返しなが、議論をすすめて行きたいとも思っています。また、障害と差別はかなり重なる概念です。他の反差別運動の中での議論や認識論的議論も織り込みながら、議論を進め理論形成していきます。そして、「差別はなくなる」とか「社会の基本構造は変わらない」という意識が、今のこの社会を覆っていきます。そういう中で、今の社会の枠組みに限定した議論になっていき、そのことが論の深化を妨げる事態も生じています。だから、過去の社会を変えようという運動の総括も必要になっています。そのことにも、差別ということをキー概念としながら議論・深化していきたいと考えています。(文責 三村)

### ■連絡・アクセス先

Eメール [hiro3.ads@ac.auone-net.jp](mailto:hiro3.ads@ac.auone-net.jp) (三村洋明)

反障害—反差別研究会 HP アドレス <http://www.taica.info/>

「反障害通信」一覧 <http://www.taica.info/kh.html>

反差別資料室 C <https://hiro3ads6.wixsite.com/adsshr-3>

ブログ「対話を求めて」 <http://hiroads.seesaa.net/>

反差別資料室 A <https://hiro3ads6.wixsite.com/adshr1>